

当報告の内容は、それぞれの著作の著作物です。Copyrighted materials of the authors

## フィールドネット・ラウンジ企画 報告書 Tibetan Mobility: Transnationality, Locality and Agency

日時 2014年11月24日(月・祝) 9:30-16:35  
場所 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所3階(306)  
言語 英語(一部、日/英通訳有)  
主催 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)

Fieldnet Lounge: Tibetan Mobility: Between Transnationality and Locality は、予定通り、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で、2014年11月24日9時から開催され、4時半頃終了した。プログラムも予定通りの順番でプレゼンテーションとディスカッションが行われた。以下、(1)出席者、(2)発表及びディスカッションの概要、(3)期待される効果の結果、(4)その他について報告する。

### (1) 出席者

合計すると、23名強が出席した。このうち、発表者は、予定通り、エミリー・イエ、別所、大川、山本、海老原、ペルキー、三谷の8名で、参加者は、出席表に記入したのは15名であった。(他に、記入を呼びかけたが、記入しなかった参加者も、2、3名いた。)

記入した15名の内訳は、研究者が4人、学生が3名、チベット関連団体職員2名、一般：6名であった。ほとんどが東京と、東京近郊からの参加であったが、1名、大阪から夜行バスで参加した学生もいた。日本在住チベット人が4名参加した。

### (2) ディスカッションの内容

#### 1) エミリー・イエ

中国雲南省の山々の生物多様性の保存活動を例として、地元の人々や、チベット伝統医療の担い手達、僧侶、NGO、学生や研究者を含む中華人民共和国のチベット族の環境主義者達が、中国の環境主義者やより広い中国の大衆、更には、難民社会や国際社会と、どのように繋がりを形成し、宗教や文化、観光や経済開発をめぐる社会政治経済的影響のなかで、彼らの活動や繋がりがどう変遷してきたかについて、発表した。

◇ 別所からの質問：現地牧畜社会では生態環境保全をめぐるさまざまなレベルのエージェントが立ち上がっている。その多層的動態にいろいろなアプロ

一斉から論文が書かれている中で、これまで総合的に『うまくいっている団体』のみに注目が集まり、それらの団体が場合によっては障害となる党や地方行政といかに交渉しているかが描かれてきた。だが、よりローカルな事例においては、環境団体の華々しい活躍を制約するのは公的政治機関ばかりとは限らない。私が知っている事例では、あるとても小規模な草の根の環境保全団体が、村レベルで僧院勢力の嫉妬をかった結果活動を阻害され、結果的にその主導権を僧院に接收されたというケースがある。成功していく過程だけでなく、ローカルな社会関係において、環境とは関係ないエージェントも含めて、場合によっては彼らの活動が失敗してしまう事例についても多くを語っていく必要があるが、エミリーさんのフィールドではこうした失敗のケースについてはどうか？

回答：地方政府と環境団体、そして僧院の三つの間に複雑な関係があり、例えば、ジェクンドやチクディルの場合、ココシリで著名になったタシドルジェやセルタのケンポ・ツルティムロドゥーら著名な活動家が行う環境運動を地方政府がより好んでサポートする傾向がみられる。ローカルな動きはそうした大きな流れに吸収されがちな傾向がみられる。

## 2) 別所裕介

チベット仏教のトゥルク間で、転生による関係と、子弟関係、血縁の3つの複雑に絡み合った状態を解説し、そのような絡み合った状態の宗教的親密性が、19世紀後半の非ゲルク派勢力の結集、1959年以降の南アジアへの宗教拠点のシフト、80年代以降の本土チベットとの関わりと、どのように関係しているのかについて発表した。

◇ エミリー・イエ・山本からの質問：なぜ亡命第三世代をめぐるトピックとして、チベット本土と亡命社会それぞれのミュージシャンの類似性を取り上げたのか？

回答：「宗教のリサイクル」（福島正人：「宗教3へのプログラム」）という概念、つまり、世俗化した社会の中で宗教がかたちを変えて生き延びていく領域のひとつとして「心理療法士」的なレベルでの社会的需要に適合していく、という道があり、ゴモトゥルクもシンガリンボチェもいずれもそれぞれが活躍する近代社会の中でそうした需要に適応した結果であると考えます。

◇ 会場参加者、浅井からの質問：GRを規定する「親密性の結合原理」は昔から継続的にあるのか？

回答：昔からあるが、59年のチベット社会の分断、および80年代初頭以降の再統合、という2つの時代的变化が背景となっていることが、前近代との決定的な違いである。なお、3つの親密性原理のうち「血縁関係」は非ゲルク派に共通するもので、ゲルク派自体はこの部分を欠落させている。

### 3) 大川謙作

チベット人が何故台湾へ移動したのか、台湾と、チベット亡命政権と、中国の間で、チベット人が置かれた政治的な立場と、その状況への彼ら自身の対応について発表した。

◇ 三谷からの質問：政治的にも社会経済的にも難しい状況におかれた台湾のチベット人の間で、何故人権運動のようなことがおこらなかったのか？

回答：ニューカマーの中にはフリー・チベット運動などをしたりと他のチベット難民と変わらない人たちもいるが、この発表の対象はオールドカマーである。彼らのうち、不法滞在の工場労働者たちは居留証獲得のための運動をしたものの、そのグループが居留証を獲得した後は、自動解散になった。台湾チベット人オールドカマーの社会運動というのはほとんど存在しない。社会的に弱勢であるがゆえにこそ、苦境に対するリアクションとしては再移民や社会的退出といったものを選ぶのであり、そのほうが、弱勢グループが社会運動をするよりも、はるかにコストが安いので合理的な事だと考える。

### 4) 山本達也

難民社会のチベタン・ポップ歌手達は、80年代から活動が盛んになってきた。カセットからCDへ更にダウンロードへと音楽環境を取り巻く技術の発達を含むグローバル化の中で、音楽面でも、経済的な収益の上げ方でも、様々な影響を受けたり、対応したりしてきた状況について発表した。

◇ エミリー・イエからの質問：ANTと山本報告におけるアイデンティティの位置づけの相違と、アクタントをどう位置付けるのか？

回答：Bruno Latourの*The Mode of Existence*に言及し、存在のレベルは一元的(singular)ではなく多元的(plural)であり得ること、言語という存在のモードにおいてはアイデンティティの問題が取り扱われうるのではないか。後者に関しては、近い将来、方法論的に練り上げたうえで答える。

◇ 別所からの質問：チベタン・ポップ歌手の「幅」（例えば、アマチュアや、カラオケ歌手等）のはあるのか？

回答：そういった歌手がいることは確かだが、プロを自認するチベタン・ポップ歌手はCD制作と作曲の経験の有無においてそれらの歌手たちと自らを差異化していることを紹介した。

#### 5) 三谷純子

インドから日本へ移動したチベット人の法的地位の曖昧さについて、特に、法務省の無国籍認定の二重基準と、その曖昧さは必ずしも不利に働くわけではないこと、及び国籍に対するチベット人の態度、対応について、発表した。

◇ エミリー・イエからの質問： セルトーのストラテジーとタクティックスの概念を用いると、国家对個人の関係では説明できない面が生じるのではないか？

回答：チベットをめぐる複数の国家間の政治状況があるので、国家自体がタクティックスを用いているとも言える状況になっている。

#### 6) ペルキー

スライドで写真を見せながら、チベットからインドへ、更に子どもの頃日本へ来て、今日看護師として、妻や母として、日本へ帰化した生活者として、インドやアメリカで暮らす家族や親族も持つ人として、これまでの様々な経験や自らの考えについて発表した。幼い頃、あまり深く考えずに日本へ来たこと、成人してインドの家族の元へ戻った時の様々な驚き、元の家族と現在の家族との複数の国境を越える繋がり、チベット人が持ち続けるチベット帰還への希望などについて語った。

#### 7) 海老原志穂

チベット難民社会には様々な地方出身者が暮らしているが、ラサ方言を中心とする中央チベット語に基づくチベット語が共通語として過去50年以上用いられてきた。しかし、彼らのチベット語には、中央チベット語の他方言にはみられない形式が存在し、また、ヒンディ語や英語からの影響も存在しており、チベット語難民共通方言が形成されていることについて発表した。

◇ エミリー・イエからの質問： 借用語ではなく、チベット語の単語を使おうという意識はあるのか？

回答：ある。例えば「コンピューター」という借用語を使わずにロクレというチベット語の語彙を使おうとするなど、チベット語の単語を使おうという意識がある。ただし、ロクレ自体が中国語からの翻訳借用ではないかという議論になった。

◇ 大川からの質問：チベット語難民共通方言にはトゥーの言葉が影響しているという話だが本当か

回答：おそらく本当だと思われる。トゥーの人は初期の難民に多かったので、言語に影響を与えていると思われる。

◇ TCV 下位方言と定住地下位方言の違いは？

回答：会場に来ていたチベット人に回答してもらったところ、TCV には、学校内でしか使わない独特の方言があるということだった。

◇ 別所からの質問：セラ下位方言はあるが、他の寺の下位方言はないのか。

回答：バイラクツェにはセラ寺があり、そういう言い方を耳にした。それぞれの寺にも独特な下位方言がある。寺ではカムツェンという地域単位で暮らしているので方言の影響がつよい。

◇ 会場参加者浅井からの質問：チベット語共通語をつくろうという動きはあるのか？

回答：難民側でも中国内でも共通語をつくろうとする動きはあるが、どれほど普及しているかはわからない。新語をのせた本、辞書なども各地で出ている。しかし、それぞれに載せている単語が違っていることもある。普及も難しい。そもそも共通語をつくるという発想も間違っているのではないかという議論になった。

### (3) 期待される効果の結果について

本企画は二つの効果が期待されていた。第1に、現代チベット研究の若手研究者の交流促進による情報の交換や議論の深化、第2に、来場者の参加を促すことで、より広い学際的な議論を通じ、今後の研究に資することであった。第1に関しては、特にエミリー・イエ博士から、現在の北米のチベット研究についても様々な情報を得、論文等を紹介していただき、各自の研究について、懇親会でも様々な議論が行われ、非常に効果があったと考える。第2に関しては、来場者のなかからも2名による質疑応答への参加があり、懇親会では参加学生からも質問や発言があった。

### (4) その他

本セミナーの開催に関して、特に、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の担当者宮崎氏には、非常に細やかなサポートをしていただいたことを記して感謝したい。